

---

# こなた7歳 ゆい15歳（後編）

ウイリー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

こなた7歳 ゆい15歳（後編）

### 【Nコード】

N1925K

### 【作者名】

ウイリー

### 【あらすじ】

こなたとそうじろうが初めて秋葉原へと行きます。オタクそのものを発揮する初めての体験です。

日曜日。

こなたとそうじろうは二人で秋葉原へと行った。

この日、電車で秋葉原へと行ったが、想像以上のオタクの数でこなたもむしろ窮屈な感じであった。

この当時はこなたは「そう」感じたのかもしれない。今のかがみとつかさがコミケに初めて行った時の感触とほぼ同じ感じだ。

30分で秋葉原へと到着したこなたとそうじろう。

「どうだ、ここがアキバだ！」

「おお…」

思わずこなたは驚きのあまり言葉も出せなかった。

日曜なので歩行者天国状態の秋葉原は、まさに人の大移動が目につく。それに写真を撮る人もいれば外国人の数も多い。

さっそく聖地巡礼と行きたいのだが、こなたはまだ小学1年生。そんなマニアックなところへ行くと没頭してしまう可能性も高い。

それどころか、迷子になりやすいところでもある。

「じゃあ、まずどこよろうか」

「一通り回ろうよ」

そこからこなたの思いが変わっていく。

『こなた、大丈夫かなあ。なにせはじめていくところだしなあ』

そんなそうじろうも少し心配気味だった。

まず立ち寄ったのは今や全国展開しているアニイトだ。兄澤店長の姿が目につく。

偶然にも店頭に出たのは兄澤店長だ。彼は池袋からそこへ異動したのだろう。

「いらっしゃいませー！！！！アニイトへようこそ　　！お

客さん、何かお探しても？」

「あ、いやちよつとマンガ買いに…」

「でしたら今話題のこれなんかどうですか！？主人公が姫を助けるという王道的な展開から一転、暗黒の世界になった世界を取り戻す少年を描いた作品は今話題ですよ！！！！」

熱血的な兄澤店長は必至でアピールしている。

「あ…でも…わたしらは…」

「おいおい、兄沢。そんなのを押し売りっていうもんだよ  
出てきたのは杉田店員だった。

「な！？杉田、お前何かいい方法があるとでも言うのか！」

「普通にこちらのほうが今値引きしてますよ！とアピールするんですよ」

「駄目だ駄目だ、そんなんじゃインパクトが足りん！」

「でも冷静にすべきですよ」

こんなしょうもないやり取りをしているうちに…

「お父さん、これほしい」

「！？？」

兄澤店長と杉田店員が驚く。

『おそるべき洞察力！』『なんとという決断力！』

「どれどれ。あーお前が読んでるやつは最新刊か。ん他にもある…」

おお、アンソロジーか。いいね」

杉田店員と兄澤店長が驚きを隠せない。

『これこそ、新世代の少女Aというものか！？』

『恐るべし！』

そして。

「「お買い上げありがとうございますーすーすー！！！！」  
「アニメイトを後にした。」

今度は石 電気というところだ。

もはや某電車男のドラマ版でも出てきたぐらいだ。

「こなた、どうしてあれ読みたいなんて思ったんだ？」

「うっん、なんとなく」

「お父さんって、どういうアニメ見るの？」

「そうだな…ロボットアニメかな。模型も持ってたりするんだぞ」

「へえー」

石 電気で中を回っていると、アイドルの声優さんらしき女性がト  
ークショーをやっている。

「ねえ、あれなあに？」

「あれか？あれは声優さんがたまに電気屋さんで来てサイン会とか  
トークショーすることが多いんだよ」

「ねえあの人の歌ってない？」

「え？」

そうじろうは一瞬固まった。

「こなたにはちよつと早いよ」

「でもその人かわいいよね」

「まあな」

「CDとかあるよね？」

「秋葉原だとふつうにあるけどな」

「売ってるとこ連れてって！」

「え!？」

そうじろうは目を丸くしながら言った。

それに困惑じみていた。

こなたとそうじろうは石 電気を後にして、ゲマズという店に行く。

やはりこなたが興味を示した声優さんのCDは売っていた。

だが、このときは声優「アイドル」という感覚はなく、需要もそんな  
になかった。

今のこなたがこうなったのもそういう憧れというよりも自分と同化

しているかの様な感覚にすら見えた。

そうじろうはそのCDを買おうか悩んでいた。

「こなたがそればかり聞けば、かなりオタクっぽくなりがちだからだ。だがかわいい子には旅をさせよ、というようにこなたの要望を無視するわけにはいかなかった。」

「 円でございますーす」

『誘惑に負けた…』

涙目なそうじろうがつぶやいた。

ちょうどお昼時だったために昼ご飯を食べていた。

「なあこなた。」

「ん？」

「他に寄りたいところはある？」

「模型屋さんなんかは？」

「こなた、お前ひょっとしてプラモデル造りたいのか？」

「かざりたいものがないかなあって」

「けどこなたにはまず無理な感じがするけどなあ」

「でも、なんか物足りないんだよねえ」

「こなたのうるうる目に負けたそうじろうは、仕方なく模型屋にも行くことになった。」

そこでようやくそうじろうもお目当てのプラモデルを購入した。

だが、こなたが模型屋に行ったのは単にプラモデルを作るのではなく、

フィギュアを飾りたかったのだった。

小1の女子だったら、ヒーローものの人形を買うことが多い。

だがこなたの場合は違った。

フィギュアに愛着を持ち始めているのである！

ますます、そうじろうもため息がつくばかりだった。

『ただのめりこみが早いんだ…』

「でも飾る時は気をつけるんだぞ」  
「うん！」

こうして一通り秋葉原を回ったそうじろうはへとへとしながら、こなたは嬉しそうに幸手へと帰って行った。

「どうだ、楽しかったか」

「うん！また来たい！」

「そうか…今度はゆいちゃんだったらどうだ？」

「うーん…」

『やっぱまずかった？』

「また行こうね」

するとそうじろうも思わず微笑んだ。

別の日。

ゆいがまた遊びに来た。

「ちわーす！こなた、アキバどうだった!？」

「うん楽しかった！」

「あれ？見かけないものだねえ」

「それ買ったんだよ」

「マジ?!」

『1年生なのにフィギュア持ってて早くね?』

やや背筋が寒い感じがしてならなかった。

「でも伯父さんと一緒に行けたのは感謝してよ」

「姉さん、今度都合よければ一緒にアキバにつれてってー」

「え!？」

言葉が出ずじまだった。

「そーね…都合がよければね…」

「マンガも買ってきたんだよ」

「へーどれどれ。これなに？」

「アンソロジードよ。なんか作品集みたいなのだよ」

「ふーん」

「でもやつぱ、姉さんが持ってきた漫画のほつが正直おもしろいか」  
「秋葉にいった意味なーし」  
笑いながら、みやげ話をしていた。

そして現在。

こなたは現在大学1年。

「かがみーん、日曜暇？」

「えー、悪いけどパス、どうせ秋葉に行こうって言っただしよ」

「久々なんだからさ、行こうよ、ねっ！つかさも一緒に」

「えっ…」

つかさが動揺する。

「一緒に行こうよ」

「おー、なら行こうではないか！」

「ちよっ、つかさ、あんたなんてこと言うの！」

「えへっ、久しぶりに行きたくなくなっちゃった。」

「みさきちと峰岸さんも呼ぶから」

「ちよ…いやーっ！」

こなたはヲタクそのものを演出中だ。

こんな日々を現在進行形でオタライフを過ごしているのである。

(END)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1925k/>

---

こなた7歳 ゆい15歳（後編）

2011年1月28日11時57分発行